

報道関係各位

2020年11月20日

世界的が注目するテキスタイルデザイナー 須藤玲子の作品を紹介する展覧会 ジャパン・ハウス ロンドンにて 2021年2月開催

- ジャパン・ハウス ロンドンは、2021年2月6日(土)から『MAKING NUNO Japanese Textile Innovation from Sudō Reiko 須藤玲子：NUNOの布づくり』を開催します。
- 国内外で高い評価を得ている日本人テキスタイルデザイナー須藤玲子の作品を、パノラマティクス（旧：ライゾマティクス・アーキテクチャー）主宰 齋藤精一による映像インスタレーションを交えながら魅せる新しい展覧会です。
- 香港のアートセンターCHAT（Centre for Heritage, Arts and Textile）と共同で手掛ける本展は、2019年に高橋瑞木（CHAT/エグゼクティブディレクター兼チーフキュレーター）のキュレーションにより大成功を収めた展示を新しい空間デザインで公開します。
- 入場無料の本展では、日本各地の染織産地の職人と協働で、サステイナブルで画期的な素材や染色技術を駆使しながら従来のテキスタイル生産の可能性を拓けてきた、須藤の日本における「布づくり」の過程を紹介します。
- NUNO テキスタイルとアートプロジェクションを組み合わせた5本の大型インスタレーションは、英国初展示となります。他にも須藤のデザイン原画やスケッチ、テキスタイルの原料や作品のプロトタイプ、動画も一挙公開します。



須藤玲子 Photo courtesy: CHAT (Centre for Heritage, Arts and Textile), Hong Kong



《Jelly Fish》1993年
Photo Hayashi Masayuki

ジャパン・ハウス ロンドンは、2021年2月6日(土)から5月16日(日)まで、テキスタイルデザイナー須藤玲子の独創的な作品を紹介する展覧会『MAKING NUNO Japanese Textile Innovation from Sudō Reiko 須藤玲子：NUNOの布づくり』を開催します。本展では、パノラマティクスの齋藤精一をアートディレクターに迎え、日本の繊維産業の可能性を広げ、サステイナブルな生産モデルを構築してきた須藤の取り組みに焦点を当てます。

日本有数のテキスタイル・デザインスタジオ NUNO のデザインディレクターを 30 年以上務めながら、テキスタイル&インダストリアルデザイナーとしての経験を積んできた須藤は、日本の伝統的な染織技術と最先端の製造技術を融合し、絹・手漉き和紙のスリット・ヤーンや熱可塑性プラスチックといった異素材を組み合わせた独創的なテキスタイルをデザインしています。須藤が紡ぎだすテキスタイルは、ニューヨーク近代美術館やヴィクトリア&アルバート博物館など世界各地の美術館のコレクションに収蔵されています。

ジャパン・ハウス ロンドンで開催される本展では、須藤の代表的なテキスタイルの製造過程を音と映像で再現する齋藤精一のアートディレクションによるインスタレーションの他、須藤のデザイン原画やスケッチ、またテキスタイルの原料や作品のプロトタイプが展示されます。インスタレーションは、テキスタイルの素材・染織地域の製造業・職人技のサステナビリティに焦点を当て、より持続可能でグローバルな繊維産業の構築に向けて、革新性と創造性を駆使した「布づくり」への須藤の想いを表現しました。

素材のサステナビリティ

和紙をはじめとした、従来の布の型にはまらない素材に、熱加工や接着といったテキスタイル技術を駆使して作り出す、須藤独自の作品をご覧ください。

鶴岡シルク株式会社（山形県）との「きびそ」を使った共同プロジェクトは、本展の見どころの一つです。きびそは、蚕が繭を作るときに最初に吐き出す太くて硬い糸のことで、これまでは織物に不向きとされ捨てられていた部分でしたが、須藤のアドバイスにより同社のキビソプロジェクトのメンバーが、きびそを細い糸に加工する機械の開発に成功し、従来の絹産業では見られなかった「廃棄物減、使えるものは何でも使う」の実現に向けた第一歩を踏み出しました。

産地のサステナビリティ

長年にわたり、日本各地さまざまな生産技術を持つ家族経営の工場と協働して布づくりをしてきた須藤作品の原点を探ります。工業機械を使った生産の可能性を押し上げ、産地の活性化を助けるべく、各社と手を取り合いながら新しい生産法の開発に力を注いでいます。

伝統と職人技のサステナビリティ

存続の危機に瀕している古い繊維機械と日本の職人技を蘇らせる、須藤独自のデザインの奥深さに迫ります。須藤はこれまで、アップサイクルや再開発によって伝統工芸品の保存に協力してきました。さまざまな分野の専門家や職人と協働しながら、緻密で複雑な職人技をどのように産業用のテキスタイル生産に取り入れているのかを解き明かします。

須藤玲子（テキスタイルデザイナー／株式会社 布 取締役デザインディレクター）は、以下のようにコメントしています。

「日本の布づくりは実に多彩です。長い年月のなかで育まれてきた伝統工芸から、世界的にも類をみない高度な技術を持つ素材開発まで、豊かな広がりを持っています。NUNO は日本全国に足を運び、日本中の産地の職人さんたちと話し合うことを大切にしています。素材を選び、模様、質感を考え、価格も含めてデザインします。1984 年以来約 3000 点の布を制作してきました。その中から選び、一階の中央には大きな幕をしつらえました。ここには日本各地の染織産地から届いた様々な素材・技法の布地があります。皆さんのジャパンハウスでのひと時に、布と戯れる喜びがプラスされますように！」

サイモン・ライト（ジャパン・ハウス ロンドン企画局長）は、

「我々は、画期的なテキスタイルを作り出してきた須藤玲子氏の素晴らしい作品を公開する展示会を英国で初めて、そして斬新な形で開催できることを光栄に思います。本展は、2019年に香港のアートセンターCHAT（Centre of Heritage, Arts and Textile）の高橋瑞木エグゼクティブディレクターのキュレーションのもとで開催され、アーティスティック・ディレクターの齋藤精一氏と須藤氏の限らない想像力が共鳴し合った内容となっています。ジャパン・ハウス ロンドンで開催される本展では、多岐にわたるNUNOテキスタイルの中でもサスティナビリティと地域性の2つのテーマに焦点を当て、展示内容により深みを持たせたものになります。」とコメントします。

【新型コロナウイルス感染予防・拡散防止措置】

ジャパン・ハウス ロンドンは、英国全域で都市封鎖措置が再導入されたことを受けて、2020年11月5日（木）から臨時休館をしております。再開時期については改めてお知らせいたします。

www.japanhouselondon.uk/covid

ジャパン・ハウス ロンドンは、英国政府観光庁（VisitBritain）が策定した業界標準「We're Good To Go」を満たしています。これは、ジャパン・ハウス ロンドンが、政府および公衆衛生局のガイダンスに従ったリスクアセスメントを実施し、必要なプロセスを実施していることを証明するものです。引き続きさまざまな感染拡大防止策を来館者の皆さまの安全のために講じて参りますので、都市封鎖措置解除後ジャパン・ハウス ロンドンが再開しましたら、安心してジャパン・ハウス ロンドンに足をお運びください。

【本展公式写真について】

本展の公式写真は、[こちら](#)からダウンロードをお願いします。

【ジャパン・ハウス ロンドンの公式リンク】

ウェブサイト：www.japanhouselondon.uk

Facebook：www.facebook.com/japanhouseldn

Instagram：www.instagram.com/japanhouseldn

Twitter：www.twitter.com/japanhouseldn

ニュースレターへの登録：<https://www.japanhouselondon.uk/discover/newsletter/>

ユーザーネーム：[@japanhouseldn](#)

【須藤玲子のプロフィール】

茨城県石岡市生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科テキスタイル研究室助手を経て、株式会社布の設立に参加。現在取締役デザインディレクター。英国UCA芸術大学より名誉修士号授与。2019年より東京造形大学名誉教授。2008年より良品計画のファブリック企画開発、鶴岡織物工業協同組合、株式会社アズのデザインアドバイザーを手がける。2016年無印良品アドバイザーに就任。毎日デザイン賞、ロスコア賞、JID部門賞等受賞。日本の伝統的な染織技術から現代の先端技術までを駆使し、新しいテキスタイルづくりをおこなう。作品は国内外で高い評価を得ており、ニューヨーク近代美術館、メトロポリタン美術館、ボストン美術館、ビクトリア&アルバート博物館、東京国立近代美術館等に永久保存されている。代表作にマンダリンオリエンタル東京、東京アメリカンクラブ、大分県立美術館のアトリウムのテキスタイルデザインがある。2018年国立新美術館にて大規模なテキスタイルインスタレーション「こいのぼりなう!」、2019年香港のCHAT (Centre for Heritage, Arts and Textile)にてSudo Reiko: Making NUNO Textilesを開催。その他国内外の数多くの展覧会に出品。

【齋藤精一のプロフィール】

パノラマティクス（旧：ライゾマティクス・アーキテクチャー）主宰。1975年神奈川県生まれ、東京理科大学工学部建築学科卒。建築デザインをコロンビア大学建築学科（MSAAD）で学び、2000年からニューヨークで活動を開始。Omnicom Group傘下の Arnell Group にてクリエイティブ職に携わり、2003年の越後妻有アートトリエンナーレでのアーティスト選出を機に帰国。フリーランスのクリエイターとして活躍後、2006年株式会社ライゾマティクス設立、2016年より Rhizomatiks Architecture を主宰。2020年組織変更により Rhizomatiks Architecture は、Panoramatik と改め、俯瞰的な視点でこれまで繋がらなかった領域を横断し組織や人を繋ぎ、仕組みづくりから考えつくるチームを立ち上げる。建築で培ったロジカルな思考を基に、アート・コマーシャルの領域で立体・インタラクティブの作品を多数作り続け、現在では行政や企業などの企画や実装アドバイザーも数多く行う。2018-2020年グッドデザイン賞審査委員副委員長。2020年ドバイ万博 日本館クリエイティブ・アドバイザー。2025年大阪・関西万博 People's Living Lab クリエイター。

【ジャパン・ハウス プロジェクトについて】

日本の多様な魅力や政策・取組を発信することにより、日本への理解と共感の裾野を広げることを目的とした新たな拠点として、外務省により世界の3都市（サンパウロ・ロサンゼルス・ロンドン）に設置されました。日本に関する様々な情報がまとめて入手できるワンストップ・サービスを提供するとともに、レストラン・ショップ等を設置し、民間の活力・地域の魅力なども積極的に活用したオールジャパンでの発信の実現をめざします。さらに、専門家の知見を活用しつつ、現地のニーズにきめ細かく対応して現地の人々の共感を呼ぶよう工夫を行います。

【ジャパン・ハウス ロンドンについて】

日本文化への関心が高まる欧州の拠点として、ロンドン市内の文化的・商業的建造物が多く所在するエリアの目抜き通りケンジントン・ハイストリートに2018年6月に開館しました。アールデコ調の歴史的建造物の中の3フロアにわたり、ギャラリー・ショップ・カフェ・レストラン・ライブラリーを備えた複合施設として、アート・デザイン・食・建築・テクノロジーなど日本の多様な魅力を通して、真の日本との出会いを現地の人々に提供しています。

【本展についてのお問い合わせ先】

ジャパン・ハウス ロンドン事務局 Marketing & Communications 課
担当：飛驒 香生里／伊佐 ハイディ（※両名を宛先に入れて下さい）
E-mail：Kaori.Hida@japanhouselondon.uk／Heidi.Isa@japanhouselondon.uk